『狼森と笊森、盗森』

作　宮沢賢治

構成・脚色：studio_o3

小岩井農場の北に、黒い松の森が四つあります。いちばん南が狼森で、その次が笊森、次は黒坂森、北のはづれは盗森です。

この森がいつごろどうしてできたのか、どうしてこんな奇体な名前がついたのか、それをいちばんはじめから、すつかり知つてゐるものは、おれ一人だと黒坂森のまんなかの巨きな巌が、ある日、威張つてこのおはなしをわたくしに聞かせました。

ずうつと昔、いまの四つの森ができました。けれども森にはまだ名前もなく、めいめい勝手に、おれはおれだと思つてゐるだけでした。するとある年の秋、水のやうにつめたいすきとほる風が、柏の枯れ葉をさらさら鳴らし、岩手山の銀の冠には、雲の影がくつきり黒くうつゝてゐる日でした。

四人の、けら（※みののような防寒具）を着た百姓たちが、東の稜ばつた燧石の山を越えて、のつしのつしと、この森にかこまれた小さな野原にやつて来ました。よくみるとみんな大きな刀もさしてゐたのです。

先頭の百姓が、そこらの幻燈のやうなけしきを、みんなにあちこち指さして

「どうだ。いゝとこだらう。畑はすぐ起せるし、森は近いし、きれいな水もながれてゐる。それに日あたりもいゝ。どうだ、俺はもう早くから、こゝと決めて置いたんだ。」と云いひますと、一人の百姓は、

「しかし地味(ぢみ)はどうかな。」と言ひながら、屈(かが)んで一本のすゝきを引き抜いて、その根から土を掌(てのひら)にふるひ落して、しばらく指でこねたり、ちよつと嘗(な)めてみたりしてから云ひました。

「うん。地味(ぢみ)もひどくよくはないが、またひどく悪くもないな。」

「さあ、それではいよいよこゝときめるか。」

も一人が、なつかしさうにあたりを見まはしながら云ひました。

「よし、さう決めやう。」いままでだまつて立つてゐた、四人目の百姓が云ひました。

四人はそこでよろこんで、せなかの荷物をどしんとおろして、それから来た方へ向いて、高く叫びました。

「おゝい、おゝい。こゝだぞ。早く来(こ)お。早く来お。」

すると向ふのすゝきの中から、荷物をたくさんしよつて、顔をまつかにしておかみさんたちが三人出て来ました。見ると、五つ六(む)つより下の子供が九人、わいわい云ひながら走つてついて来るのでした。

そこで四人(よつたり)の男たちは、てんでにすきな方へ向いて、声を揃(そろ)へて叫びました

「こゝへ畑起してもいゝかあ。」

「いゝぞお。」森が一斉にこたへました。

みんなは又叫びました。

「こゝに家建てゝもいゝかあ。」

「ようし。」森は一ぺんにこたへました。

みんなはまた声をそろへてたづねました。

「こゝで火たいてもいいかあ。」

「いゝぞお。」森は一ぺんにこたへました。

みんなはまた叫びました。

「すこし木きい貰(もら)つてもいゝかあ。」

「ようし。」森は一斉にこたへました。

男たちはよろこんで手をたゝき、その日、晩方までには、もう萱(かや)をかぶせた小さな丸太の小屋が出来てゐました。子供たちは、よろこんでそのまはりを飛んだりはねたりしました。次の日から、男はみんな鍬(くは)をピカリピカリさせて、野原の草を起しました。女たちは、まだ栗鼠(りす)や野鼠(のねずみ)に持つて行かれない栗(くり)の実を集めたり、松を伐(き)つて薪(たきぎ)をつくつたりしました。そしてまもなく、いちめんの雪が来たのです。

その人たちのために、森は冬のあいだ、一生懸命、北からの風を防いでやりました。

春になつて、小屋が二つになりました。

そして蕎麦(そば)と稗(ひえ)とが播(ま)かれたやうでした。そばには白い花が咲き、稗は黒い穂を出しました。その年の秋、穀物がとにかくみのり、新らしい畑がふえ、小屋が三(み)つになつたとき、みんなはあまり嬉(うれ)しくて大人までがはね歩きました。ところが、土の堅く凍つた朝でした。九人のこどもらのなかの、小さな四人がどうしたのか夜の間に見えなくなつてゐたのです。

みんなはその辺をあちこちさがしましたが、こどもらの影も見えませんでした。

そこでみんなは、てんでにすきな方へ向いて、一緒に叫びました。

「たれか童(わらし)やど知らないか。」

「しらない。」と森は一斉にこたへました。

「そんだらさがしに行くぞお。」とみんなはまた叫びました。

「来お。」と森は一斉にこたへました。

そこでみんなは色々の農具をもつて、狼森(おいのもり)に行きました。森へ入りますと、すぐしめつたつめたい風と朽葉(くちば)の匂(にほ)ひとが、すつとみんなを襲ひました。

みんなはどん／＼踏みこんで行きました。

すると森の奥の方で何かパチパチ音がしました。

急いでそつちへ行つて見ますと、すきとほつたばら色の火がどん／＼燃えてゐて、狼(おいの)が九疋(くひき)、くる／＼／＼、火のまはりを踊つてかけ歩いてゐるのでした。

だん／＼近くへ行つてみると居なくなつた子供らは四人共、その火に向いて焼いた栗や初茸(はつたけ)などをたべてゐました。

狼(おいの)はみんな歌を歌つて、夏のまはり燈籠(とうろう)のやうに、火のまはりを走つてゐました。

「狼森(おいのもり)のまんなかで、

火はどろ／＼ぱち／＼

火はどろ／＼ぱち／＼、

栗はころ／＼ぱち／＼、

栗はころ／＼ぱち／＼。」

みんなはそこで、声をそろへて叫びました。

「狼(おいの)どの狼どの、童(わらし)やど返して呉(け)ろ。」

狼はみんなびつくりして、一ぺんに歌をやめてくちをまげて、みんなの方をふり向きました。

すると火が急に消えて、そこらはにはかに青くしいんとなつてしまつたので火のそばのこどもらはわあと泣き出しました。

狼(おいの)は、どうしたらいゝか困つたといふやうにしばらくきよろ／＼し

てゐましたが、たうとうみんないちどに森のもつと奥の方へ逃げて行きました。

そこでみんなは、子供らの手を引いて、森を出ようとしました。すると森の奥の方で狼(おいの)どもが、

「悪く思はないで呉(け)ろ。栗(くり)だのきのこだの、うんとご馳走(ちそう)したぞ。」と叫ぶのがきこえました。みんなはうちに帰つてから粟餅(あはもち)をこしらへてお礼に狼森(おいのもり)へ置いて来ました。

つづく

※原作より一部、studio_o3が朗読用に構成しています。

底本：「宮沢賢治全集８」ちくま文庫、筑摩書房
１９８６（昭和６１）年１月２８日第１刷発行
初出：「イーハトヴ童話　注文の多い料理店」
盛岡市杜陵出版部・東京光原社
１９２４（大正１３）年１２月１日